

20th

新 響

新 交 響 樂 団

第 20 回 定期演奏会



THE NEW SYMPHONY ORCHESTRA

20th Subscription Concert

指揮 外山 雄三 (客演)

Conductor YUZO TOYAMA

- I 歌劇「後宮よりの逃走」序曲 K.384 W. A. モーツアルト
"Die Entführung aus dem Serail" Overture K.384 W. A. Mozart

- II 交響曲第5番 変ロ長調 F. シューベルト
Symphony No. 5 B Dur F. Schubert

- 1 アレグロ
Allegro
- 2 アンダンテ・コン・モート
Andante con moto
- 3 アレグロ・モルト
Allegro molto
- 4 アレグロ・ヴィヴァーチェ
Allegro Vivace

- III 交響曲第4番 ヘ短調 Op. 36 P. チャイコフスキー
Symphony No. 4 F moll Op. 36 P. Tchaikowsky

- 1 アンダンテ・ソステヌート——モデラート・コン・アニマ
Andante sostenuto——Moderato con anima
- 2 アンダンティーノ・イン・モード・ディ・カンツォーネ
Andantino in modo di canzone
- 3 スケルツォ・ピチカート・オスティナート アレグロ
Scherzo Pizzicato ostinato Allegro
- 4 フィナーレ アレグロ・コン・フォコ
Finale Allegro con fuoco

新
交
響
楽
団
第
20
回
定
期
演
奏
会

神 1
田 9
共 7
立 0
講 年
堂 11
月
4
日
(
水
)
7
時

— 客 演 指 揮 —

外 山 雄 三

Yuzo Toyama



1931年東京生れ、父は日本の音楽教育の功労者、外山国彦。

1934年ピアノを始め、48年東京芸術大学作曲科入学、下総皖一に師事。

1952年、芸大卒業後、直ちにNHK交響楽団副指揮者に就任。

1956年N響を指揮してデビュー。58年～60年、ウィーンに留学。

1960年N響世界一周演奏旅行に際し、指揮者に選ばれて参加、インド、ソ連、ヨーロッパ、アメリカの各地で、自作の「管弦楽のためのラブソディ」等多くの作品を指揮する。

1963年N響定期演奏会を指揮、大阪フィルハーモニー交響楽団の指揮者も兼任。

1967年から70年3月まで、京都市交響楽団常任指揮者。

日本初演の作品も多く、シェーンベルク「月につかれたピエロ」、プロコフィエフ「平和の守り」「アレクサンダー・ネヴスキー」、ストラビンスキー「エディプス王」、ショスタコーヴィッチ「ステンパラージンの処刑」などがある。

そのほか、1964年N響の東南アジア、大洋州演奏旅行、1966年の北・南米演奏旅行に参加するなど指揮者として現在まで精力的な活動をしている。

作曲家としては、1951年第20回音楽コンクール作曲部門に入賞、1952年「日本の国民音楽の創造」をモットーとして、林光、間宮芳生らと「山羊の会」を結成、すぐれた作品を数多く発表している。

＜主な作品＞ヴァイオリン協奏曲第1番（第12回尾高賞）、同第2番、管弦楽のためのラブソディ、ディヴェルティメント、ピアノ協奏曲第1番、同第2番、交響曲・帰国、ミュージカル・祇音祭、バレエ・幽玄、チェロ協奏曲。

特に「バレエ・幽玄」はオーストラリアバレエ団によって1965年、チェロ協奏曲は、ロストロポーヴィッチ独奏で1967年モスクワで初演されるなどその作曲家としての名も国際的になりつつある。

目 録 解 説

歌劇「後宮よりの逃走」序曲

モーツァルト

モーツァルトの歌劇の台本には後に主流となったような悲劇的、史劇的、思想的、伝説的な内容を扱ったものではなく、通俗的な内容の台本に依ったものばかりである。といっても、モーツァルトの音楽自体は決して“三文オペラ”のそれではない。至るところ軽妙、洒脱で美しく、しばしば機智に富んでいる。

このオペラも筋書はトルコの太守の後宮（ハレム）に囲われた娘を、青年が苦心の末結局本国へ連れ帰るという他愛のないもの。曲の終りにある色んな打楽器の連打は今日では驚かないが、モーツァルトは異国情緒を出すために取り入れたのであり、当時の聴衆には耳珍らしかったようだ。この様なトルコ趣味は実は当時の流行で誰でも知っているように彼はピアノソナタにもトルコマーチを取り入れている。

エピソードがあるが、このオペラの女主人公の名が当時恋愛中で後にモーツァルトの妻となったコンスタンツェ（作曲家ウェーバーのいとこだが結局は平凡な女だったらしい）と同じ名だったので彼は非常に上気嫌で曲を書き上げたといわれている。ちなみに、ベートーベン唯一のオペラ“フィデリオ”は女主人公レオノーレが男装した時の変名だが、当時作曲者は同じ名前の女性にいたく心をよせていたので是非とも表題を“レオノーレ”としたかったという。ところが折悪しく同名の通俗オペラが他人によって書かれていて周囲の強い反対に会い、やむなく“フィデリオ”とすることを認めたという。

交響曲第5番 変ロ長調

シューベルト

粉れもなく天才に違いない大作曲家達の間にも（性格の差といった方がよいかもしれないが）才能の差はあったであろう。例えばモーツァルトは一つの曲集（ソナタとか変奏曲とか）の中で同じような形式・内容をもった曲を何曲も作る事に耐えられる作曲家だったし、シューベルトは一つの曲の中で同じような音型をほんの少しずつ変えながら悠揚せまらざる音楽を作りあげることの好きな作曲家であった。ところでベートーベンはそのどちらにも耐えられない作曲家だったろう。しかし、モーツァルトの場合、幸いなことに今日演奏されるのは膨大な作品群の比較的一部であるので我々は似たような曲を幾つも聴かないですむ。又、シューベルトの場合は、一部の曲の緩慢さを美しい旋律と和声が救ってくれる。

大作曲家の中には、傑作の数はそれ程多くはないが、前人の誰もか持ち得なかった特殊な感覚を持ち新しい音楽を作り出した人と、音楽自体は特別新奇ではないが、

美しいメロディーや気の効いた音型を次から次と作り出す才能をもった人と二つのタイプがあるように思う。

前者の代表にはベルリオーズ、ドビュッシー、ストラヴィンスキーが挙げられ、シューベルトは明らかに後者に属するだろう。ついでにチャイコフスキーはやや中間的だが、どちらかといえば後者に近い。又、ベートーベンが偉大なのは二つのタイプの特徴をともに備えていたからだと思われる。

さて、シューベルトのように特に珍奇な音楽を作らなかった作曲家といえども、仮にも大作曲家と呼ばれるからにはそれまでの音楽にはなかった個性と何等かの進歩性を備えていない筈はないであろう。シューベルトの場合“転調の妙”がその第一にあげられると思う。勿論、単に一本の旋律だけでも音楽は作り得る。しかしどんなに美しいメロディーでもただそれだけではすぐに飽きてしまう。やはり様々な旋律やリズムの組合せ、音色や音量の変化を持った音楽の方がより大きな感動を与える可能性をもった音楽となり得るだろう。

音楽の要素のうち調性はいわば音楽が走っている道路である。転調は上下左右どこか近くを走っている別の道路に乗り移ることにたとえられる。一本の道路だけを使っても目的地に達することができるが、それでは単調で退屈な旅にならざるを得ないだろう。シューベルト以前にも調性への偉大な挑戦者は勿論何人かいた。特にその“平均律クラヴィア曲集”で転調を誇示して見せたバッハの巧績は不朽であろう。しかし“平均律”の場合、増減音程の進行ののち半音の上昇というやや類型的な転調の多用が特徴的であり、又、モーツァルト等が多くは必要に応じて、しかるべき箇所、端然とそれを行なったのに対し、シューベルトが目ざしたものはもっと自由奔放でもっとなげない溶けこむような転調である。これこそが後々に受け継がれた最も魅力的な手法であろうが、彼自身の作曲の中では、“未完成交響曲”に最も完成された姿を見ることができよう。

さて本日の演奏される第5交響曲は彼が若干19才の時の作品であるが既に一楽章の一部や、二楽章にその面目を見ることが出来る。この曲は最近とみにその美しさが認められてきたようで、新響以外にもこれを演奏しているアマチュアオーケストラがあるようだ。

第一楽章（アレグロ）：ロザムデ序曲を想わせる軽快な楽章。曲想は交響曲より舞踊音楽の序曲にあう。

第二楽章（アンダンテ・コン・モート）終止歌謡風の旋律がオーケストラの上を流れる。最も個性的な音色をもった楽章であろう。

第三楽章（メヌエット・アレグロ・モルト）モーツァ

ルトの交響曲40番のメヌエットを連想される方も多と思う。トリオは作曲者が好んだレントラー舞曲（ワルツの前身）風に書かれている。

第四楽章（アレグロ・ヴィヴァーチェ）調性や曲想は1楽章と共通だが、更に軽快さを増している。ヴァイオリンや木管の使い方が小気味よく、簡潔に曲が閉じられる。

交響曲第4番へ短調

チャイコフスキー

チャイコフスキーは、37才の時、かつての教え子と一度結婚を経験しているが、この妻とはわずか2ヶ月で離婚し、音楽史上で稀に見る不幸な結婚として有名である。ところが同じ年にフォン・メック夫人という未亡人の篤志家から、年金贈与の申し出があり、お陰でチャイコフスキーは教職を辞し、作曲に専念出来る事になった。この年金は彼の晩年まで10数年に亘って送り続けられたが、夫人は世間をは憚り終生チャイコフスキーと合わずに終ったという。果して彼が夫人に対して、ブラームスがクララ・シューマンに対して抱いていたような、あから様な恋慕の情を感じていたかどうかは分らないが、彼女の存在が彼にとって非常に大きな心の支えになっていた事は間違いない。この第4交響曲は彼からメック夫人に捧げられた最初の大曲であり、又最も重要な曲である。

さてチャイコフスキーの後半の3曲の交響曲は、いずれも傑作だが、一般には特に6番“悲愴”がきわ高い評価を得ているだろう。ここでは第6との比較はさて置くとして、4番と5番を比べてみると、一見全く異質の両者が全体の構成、オーケストラの扱い方等よく似た点が多いのに気づくし、全体的な価値にも差がない様に思える。ところがチャイコフスキーは5番の初演が批評家の不評をこうむった時、メック夫人に次の様な手紙を書き送っている。「第5交響曲を演奏してから私はこの曲が失敗作であるという結論に達しました。この中には何かイヤなものがあり、大げさに飾った色彩があり……中略昨夜、私はあなたと2人の交響曲である第4番を調べて見ました。こちらの方はなんと優れている事でしょう。これは全く悲しい事です。

そううつ症的彼がうつ病的気まぐれで書いたかもしれないとは云え、彼が非常に第4番を好んでいた事がわかる。この交響曲でまず顕著なのは音階及び半音階進行の多用である。これは対位的に、装飾的に、一見和声、的に、或いは旋律そのものに使われて著しい効果を上げているが、これが甘哀しいロシア的憂うつきの元を形造っているようにも思える。

更に大きく曲を眺めるなら、楽器群のユニゾンの多用

により旋律とリズム、旋律と対位旋律、旋律と装飾音型及び2つの楽器群の競合（掛け合い）というシンプルな形体が極めて頻繁に使用されているのが目立つ。

ところで前に複雑な音楽程高度であると述べたが単に無意味な複雑さが高度な音楽を作る筈がない。ベートーヴェンは晩年（自身の傾向とはうらはらに）単純な音楽こそ最上のものだと語っているが、音楽を単なる音の羅列と区別するために設けられている様々な規制ゆえ、一つの旋律に例えば、音階のような単純な音型ほど組合せるのが難かしいのである。それは恰かも簡単な表現で多くの内容を云い表わす美しい定理を見出すのが困難な如くであろう。

第一楽章（アンダンテ・モデラート）

金管の意志的なファンファーレ（運命の動機）の後、弦が執拗に揺動する第一主題を奏する。木管で示される第二主題は弦に受けつがれ、直ちに展開され発展してゆく。

第二楽章（アンダンティーノ）

冒頭のオーボエによる甘いメロディーは後にチェロ、ファゴット、バイオリン、ヴィオラにも奏される。間に長調の中間部が入り一瞬希望に満ちた気分をকাশし出す。

第三楽章（スケルツォ・アレグロ）

弦楽器は全てピッチカート奏法に終止する特徴ある楽章。中間部の木管による装飾的音型、金管のマーチ風の断続和音も印象深い。後者ではティンパニーの効果がすばらしい。

第四楽章（アレグロ・コン・フォーコ）

弦、木管によるめまぐるしい序奏の後、民謡による主題、そしてマーチ風主題が示され様々に発展する。やがて冒頭の運命動初機が再び奏された後、民謡主題は最後には金管に引取られて圧倒的盛上りのうちに曲が結ばれる。

本来なら観賞の助けとなるように、なるべく曲目の詳しい説明をすべきだったと思うが、今回は、恐らく毎回少しづつ毛色を変えて行きたいという編集者の意向から多少理屈っぽいものをという要請があった。しかし結果的にどちらにも徹しない妙なものが出来上ったかもしれない事をお断りしておきます。 (C) 菱沼佳史

外山雄三氏にきく……………

芥川音楽監督の骨折りによって、外部の良い指揮者によって刺激されたいという団員の希望が実現することになった。練習の終わったある晩、外山先生を囲んでオケ談義に花が咲く。以下はその再現である。

新響はアマチュアオケとしては(?)一流……

◇先生、私達新響をご存知でしたか。

——私はこのオーケストラの評判はよく聞いているのですが、演奏会は残念ながらまだ聴いていないんです。アマチュアオーケストラはあまり聴いたことがないんですが15年前位前かな、一度渋谷の変な裏の所で新響がベートーベンの第5番の練習をやっているのを聴いたことはあります。その頃は僕もまだ棒振りじゃなかったんじゃないかな。それから京都大学のオーケストラと一度お付き合いをしたことがある程度ですね。

僕の知っている音楽家達は新響の評判を、「日本のアマチュアオーケストラとしてはずばぬけて高いレベル」といつていました。ただ、“アマチュアオーケストラとしては”なんて但し書きがついているんでね。(笑)

芥川氏の熱意にひかれて……

◇新響を引き受けられたことについて。

——僕は小学校、中学校、上野音楽学校とも芥川さんの後輩なんです。中学3年の時始めて芥川さんにお会いしてそれ以来……もう24、5年。昔から芥川さんのファンでもあるし、音楽家としての芥川さんの素適なこともいろいろ知っているし、昨年の夏は、僕がまだ常任であった京響のサマーコンサートにわざわざ東京からかけていただいたりして……

芥川さんがこんなに長い間、話をきくと何だかすごく面白そうにやってらっしゃるオケというのは、きっと素晴らしいオケであるにちがいない、ということで引き受けたのです。

今夜のプログラムについて……

——チャイコフスキーの4番というのはオーケストラにとってもあんまり有難くない曲で、特に第1楽章はすごくいろいろな意味でむづかしい場所が沢山あって、それを征服する喜びみたいなものはあるにはありますが、指揮者にとっては大変な曲です。ですからオケ側の提案をああそうですかといつて引き受けた次第なんです。私は指揮者としては、第9とか、第5(運命)、エロイカ、新世界、悲愴などはいやというほどやっていますが、このチャイコフスキーの4番は不思議とあんまりやってないんです。そういう意味では、僕にとっても新鮮で、あ

あやってみようか、こうやってみようかということがあり楽しみにしています。

シューベルトの5番というのは、オーケストラとプログラムのプロポーズという時に、ハイドンのハ長調「熊」(No.82)もそうですが私はとっても好きなので、オーケストラにも自分がとても好きだということが伝わるだろう、そのくらい好きなのだという自信といつたらちょっとオーバーですけど……とにかく好きなので皆さんとこれを一諸に、すごく名演しようというより楽しもうという気があつて選びました。

それから、「後宮よりの逃走」もかわいらしくて、オーボエのソロがあつてきれいだし、チャイコフスキーでは金管の方々は終わったあとしばらくは立てないんじゃないかというほどエネルギーがなくなっちゃう曲なので、その前にウィーンもので一諸に楽しませようという気があつて……

指揮棒に敏感な新響(?)……

◇練習でお感じになったことを。

——言ったことがすぐなおるという事です。芥川さんの指揮に大変慣れているんで、指揮者がちがうとまるで初見同様になってめちゃくちゃになってしまうと、おどかされてたんだけど……そんなことは全然なくて(笑)

正直いつて僕がこう思っているということがわりと、というより大変敏感に伝わるんでびっくりしました。

◇**ain**ザッツ(音の出)が悪くて出おけるとよく言われるのですが。

——出おけるというよりは、今日は特に弦楽器が、**espressivo**でひこうと思うと突然テンポがかわるくらい遅くなる。だから**espressivo**にはひいていけるけれど、結果としては一つ一つていねいにひいておもくなっている。

◇**pp**を強調されますがアマチュアオーケストラは**pp**をひくのが下手なのですが。

——というよりダイナミックの差がないとつまらないからで、できあがってからここは大きく、小さくというのは僕は反対です。いろんなことが全部ひけてから表情が出てくるというのは嘘だと思う。たとえば、ピアノの基礎を習う時、無味乾燥で何でもコッチン、コッチン、指さえ丈夫になればよいという教育をうけるとねえ、ちがっちゃうでしょう。だから始めから、特にオーケストラの場合は楽譜に**p**とかいてあつたら反射的に**p**でひくせを身につけるべきだと思います。

まだひけないんだからという、それは程度問題で、たしかにはっきり譜面もよみきれないし、どう弾いたらよいかわからない時はいろんなことをやってみようがないということはあるけれど、一方、ちゃんとひけるまで

何も考えないでよいということは反対です。

アマチュアゆえの妥協は論外……

◇プロのオケだったらこうやるんだけどアマチュアだからこうやろうというようなことは。

——そのようなアマチュアだからというような前提がなければならぬ。僕らは引き受けたくない。それはもちろん技術的に完全なオーケストラ、あるいはそれに近いオーケストラというのと、そうでないオーケストラとの違いは意識しなくても自然に出てくるかもしれないけれども、指揮者の立場としては、皆さんがアマチュアだから、俺は本当はこれくらいのテンポでやりたいんだけど、これくらいで妥協しようという気は、たとえテンポのことだけでもそういう気はないです。

一生懸命やってもやってもできない所はあるでしょうけれどもはじめから手加減するなど論外です。

からだで通じ合うアンサンブルを……

◇指揮者とオーケストラとの関係について。

——僕はタイプとしてあまり演説しない方なんです。しないというよりできない、言いたくない、かといって手で全部あらわせるなんて自信があるわけでもないんだけど。口で言って、頭でわかってもらうよりも、音楽というのはやはり自分のからだでできるかできないかということが先になる。演説で20分つぶすより、その間にあと2回繰返し練習する方がましだと思う。

僕がオーケストラとやって非常にうまくいったと思うのはどういうことかという、指揮棒をふってひっぱってゆく、合わせるということではなく、皆んながお互に聴き合ってうまく行っている時に、ちょっとプレーキをかけたいとか、あおりたいとかいう時だけすればよい。これは習慣だと思う。新響でもはじめての時は全然だめだったけれども2回目になったら僕は何もドライブしないのに皆さんが聞いてやってらっしゃる。最初は新しい指揮者に注意が向きすぎてできなかったと理解している。

だから合せてくださいと僕が言うのは何でもないけど、そんなことはいわないでも自然に聴き合わなければならぬ状態に僕は皆さんを追いこみたい。

いわゆる西洋音楽をやっている我々は、毛唐にくらべてどうしても弱いところがある。非常に秩序正しくて、きっちりさらってあっても、自発性、積極性が弱いとか、ないとか、とにかくアンサンブルの上においても自然にそれがお互に言葉でなくて、からだでわかる間柄でありたい。皆さんだって、何も考えなくてもできたという部分もあるわけだから、僕がわざとあいまい

に棒をふって皆さんの方でどうしても聴き合わなければいけないという所を作ったりということも時々やります。今日はあまりやりませんでした、なんてあまりタネをもらしちゃうと……（笑）

コンサートマスターについて……

——日本のオーケストラではコンサートマスターらしいコンサートマスターが少いですね。伝統が浅いためにとくに座ってコンサートマスター業を覚えるということもないし、守備範囲がわかっていないんでしょうね。もっとも2ndヴァイオリンのトップには不思議と優れた人が多いですね。

日本の場合、指揮者がオーケストラを指導することによってなっちゃうんだけど、良いオーケストラの場合、たとえば10年前のウィーンフィルとカラヤンのモーツァルトの演奏会の時、終演後彼がオーケストラに起立をすすめてもオーケストラは起立せず楽器をたたいて“よくやった”という訳ですね。

それからヨーロッパの古いオーケストラのコンサートマスターはスタンダードのレパートリーになっている曲は全部暗譜しているんです。そして棒ばかり見ていて、あとであそここのところはどうしてあんな顔をしたんだとか前はこうやってたぞとかいうことを言う。ですからコンマスは何でも知っていなければいけないのです。指揮者はオーケストラと一緒に何かを作っていくのであって、指揮者がスターになったのはここ20年位ですからね。とびぬけて上手というだけではないのでしょう。

ボーイング（弓使い）について……

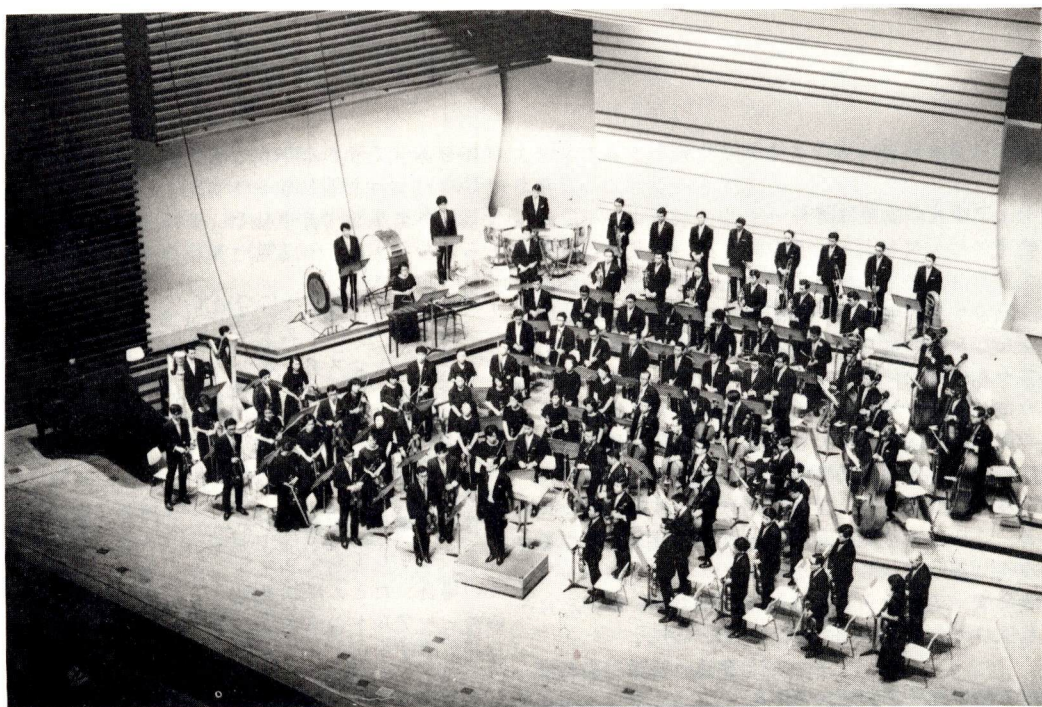
——僕は好きじゃあないんですが、クレメンス・クラウスがこういうことを言っていた。オーケストラが気に入らないボーイングをしていると、メチャクチャなボーイングを提案するのだそうです。そうするとコンサートマスターは何くそという訳で素晴らしいボーイングを考えてくるんだそうです。

とにかく、こうでなければ絶対にだめだというボーイングはない。もっとも、指揮者としては、こんな策略をめぐらすより、こういう音を出してくれとだけいっている方が、ずっと楽ですけどね。（笑）

◇最後に新響に対して何か。

——新響の皆さんには、他のセクションがうまく行かない時に関心をもつオーケストラであって頂きたい。プロのオケでも他のパートに全然興味をもたないオケがありますが、ずれたらお前ずれたぞといいあえるオケでないといいアンサンブルにはなりません。

◇どうもいろいろと有意義な話を有難うございました。



新 交 響 楽 団

最近の主な活動

1955年1月、“労音アンサンブル”として出発し、その年の暮の、芥川氏との出会い、1957年11月、第一回定期演奏会の開催、第二オーケストラ、第三オーケストラ吹奏楽団の誕生、等を経て、1966年、団の運営方法をめぐって東京労音と対立し、芥川氏を擁する団員のほとんどの希望で、労音から独立、新たに新交響協会を設立、新交響楽団、新日本交響楽団、新交響吹奏楽団、の三つの団体による新交響楽協会は独自のユニークな活動を進めて来ました。そして本年10月、日頃私共の考えている理念をさらに、おしすすめるために、東京文化会館を中心に活動している他のアマチュア楽団に呼びかけて東京都アマチュアオーケストラ連盟を発足させました。

新響としては、年間を通じての活動計画、定期演奏会2日制（東京と近県）などで演奏の機会を沢山もち、団員の不足を補いつつ充実した活動をして行きたいと考えています。来年度の演奏曲目もメインプログラムは一応決定し、4月はブラムスの第3交響曲他、8月はR. コルサコフの“シェラザード”他、10月はマーラーの第1交響曲他、12月はベートーベンの第九交響曲となっています。

財政的には月々の団費 400円と演奏会収入のみの孤立無援で非常に苦しいのですが、登録会員も 500名に達し聴衆の皆さまの声援で一諸に音楽の核心に触れる感動が得られるよう努力したいと思っています。

1969年

- 4月1日 第18回定期演奏会 東京文化会館
ピアノ協奏曲第1番＝ベートーベン、交響曲第5番
＝ショスタコービッチ他、ピアノ独奏＝岡村梨影
- 8月4日 サマーコンサート 東京文化会館
交響組曲「ミシシッピー」＝グロフェ他
- 10月26日→11月4日 九州沖縄芸術祭参加演奏旅行
交響曲第8番「未完成」＝シューベルト、バイオリン
協奏曲＝チャイコフスキー、交響曲第9番「新世界より」＝ドボルジャック他
- 12月21日 特別演奏会 厚生年金会館
合唱団鯨と共演、オラトリオ「救世主」＝ヘンデル

1970年

- 4月13日 第19回定期演奏会 日比谷公会堂
交響詩「前奏曲」＝リスト、交響曲第101番「時計」
＝ハイドン、組曲「展覧会の絵」＝ムソルグスキー
＝ラベル編曲
- 7月1日 合唱団鯨演奏会に出演 渋谷公会堂
オラトリオ「天地創造」＝ハイドン
- 8月20日 サマーコンサート 東京文化会館
輕騎兵序曲＝ズッペ、天国と地獄序曲＝オッフエン
バッハ、ウィンザーの陽気な女房たち序曲＝ニコライ、
ハンガリア狂詩曲第2番＝リスト、組曲水上の
音楽＝ヘンデル、組曲大峡谷＝グロフェ

音楽をアマチュアの手には……東京都アマチュアオーケストラ連盟の結成

演奏家と聴衆の分離

商業主義に乗った音楽ブームがある一方、そこから生れた若者のいったいどれほどが、音楽の楽しさを知っているのでしょうか。ギターブーム、エレキブーム、ピアノブームも一応おさまった感があり、お金さえあればすぐ楽しめる、従ってあきるのも早い、手っとり早い享乐的なものに走っている現在、苦しい練習を伴うもの、それによってのみ味うことのできる深い喜びは忘れられているかのようです。

のみならず、若い頃に楽器を覚えても年をとるにしたがって、精神的な必要性は高まるにもかかわらず、演奏者から聴衆へ、さらに聴衆でもなくなって音楽そのものから遠ざかって行く現実、演奏家と聴衆の分離に更に拍車をかけています。

音楽をアマチュアの手には……

フランスの経済学者ジャン・フーラスティエによれば、20世紀末には人間は1年に1200時間だけ働けばよいことになるそうである。つまり週休二日制で毎日6時間働き1週30時間、年間40週勤務で約1200時間というのが1年の労働時間というわけである。これに対して睡眠、食事、通勤を除いた余暇時間はなんと約3倍の3500時間になるという。もしこれが事実だとすればこれほど潤沢になった余暇時間を私達はどうやって使ったらよいのだろうか。“サラリーマンの生きがい論”華やかな昨今、これを満すものが音楽のみでないことはもちろんですが、私達は少くとも音楽がその一翼を荷うべきであるという信念をもっています。

音楽を明日の生活のための再生産の手段とみるか、音楽そのものの芸術性を追求するのか、それは個人の接し方で異なりましょうが、音楽自体は特殊な技術をもった者だけのものであるはずがありません。

オーケストラ連盟の目的

私達は少し気負いすぎているかもしれません。

私達は自己満足だけではない演奏がしたいのです。

合奏に加わりたいたいと思いながら機会がないでいる人はいらはずです。

合奏の喜びを知らず、きびしい訓練に耐えて始めて得られる征服感、充実感を知らない人はいらはずです。

オーケストラはうるさくて性に合わないが、室内楽ならやってみたいという人はいらはずです。

私達のこうした精神的な欲求に応えてくれる社会環境、公共施設は全くといっていいほど、絶対的に不足しています。私達は団結することになりました。今は小さな輪でできたばかりですが、この輪を大きく広げてゆきたいと思っています。

(太田記)

＜問合＞ 連盟事務局 新宿区須賀町14大湊ビル TEL 357-5255

(加盟団体)	(連絡先)	(練習日)
OB交響楽団	目黒区上目黒4-28-13 井上	木
新交響楽団	新宿区須賀町14 大湊ビル	木
新交響吹奏楽団	中野区中野5-22-24 池田	金
新日本交響楽団	千代田区神田駿河台3-6 全電通会館内日音協気付	日
東京楽友協会 交響楽団	中野区沼袋1-33-5 福島	土
都民交響楽団	台東区上野公園1-2 東京文化会館事業課内	水

東京都アマチュアオーケストラ連盟設立宣言

戦後25年を経た今日、私達を囲む社会環境は職場における人間疎外、余暇の享楽主義的消費へと益々その度合を強めています。音楽界を顧れば、外来音楽家の活況に較べて、邦人音楽家の活動は依然低調の域を出ず、外面的な華やかさに反してむしろ相対的退化傾向さえみられています。

音楽にプロフェッショナル、アマチュアの区別がないとすれば、音楽文化を支えるものは、その大多数を占めるアマチュアであり、アマチュアの質量両面の向上こそ急務であると考えられます。しかし、現状は、個人の精神的成長と共に逆に音楽からは遠ざかる者が大多数であり、彼等の“する音楽”への可能性を考えると誠に惜しいものがあります。

これは社会環境上、今すぐ解決できない面もありますが、立派な活動をする実力のある団体でも、場所、楽器、経費の制約からそれを発揮できないでいるなど、一つには音楽文化行政上の欠陥と考えられます。

私達は都内に活動の拠点をもち演奏団体として、以上のことを顧み、又従来互に何の連絡もとらず、社会的にみれば重複した活動もあったことを反省してきました。そしてこの解決に討議を重ねた結果、ここに各団合意に達しましたので①各団体の自発的創造性を確保しつつ、アマチュアオーケストラ団体の物的活動基盤を得ること、②これを通じて、我国の音楽文化の向上に役立つよう広く社会に働きかけること、を目的として、“東京都アマチュアオーケストラ連盟”の設立を宣言します。

1970年10月5日

東京都アマチュアオーケストラ連盟

—新響次回演奏会予告—

第九特別演奏会

日 時	12月21日(月)、23日(水)午後7時開演
会 場	神田 共 立 講 堂
曲 目	弦楽のためのアダージョ……………バーバー 交響曲第9番「合唱付」……………ベートーベン
指 揮	芥 川 也 寸 志
独 唱	佐野順子(Sop)、菊地洋子(Alt)、金谷良三(Ten)、田島好一(Bar)
合 唱	合 唱 団 “鯨”

新響のマークを募集中!! (該当作がでてこないで締切を延期しています)

新交響楽団は現在、団員バッジ、プログラム等に使用するマークの図案を募集中です。

◇応募方法 A4版トレース用紙に黒インクで、作図方法、簡単な図案の意味及び、住所、郵便番号、氏名(フリガナ)、年令、性別、職業を書き添える。

宛先 〒160 東京都新宿区須賀町14 大湊ビル 新交響楽団 TEL (357) 5 2 5 5

◇締 切 12月31日(当日消印有効)

◇謝 礼 当選者1名には新響の演奏会の終身招待状を。
規定にあった応募者全員に次回演奏会の招待状を。

◇参 考 正式名称……新響楽団、 英語名……THE NEW SYMPHONY ORCHESTRA

—新響の団員を募集しています—

メンバー表を見てもわかるとおり、新響団員は、サラリーマン、主婦、学生などで構成され、音楽を職業としている者はおりません。

どなたでも、簡単なテストを受けて団員になることができます。お気軽に下記へ電話下さい。

定期練習 毎週木曜日、文化会館リハーサル室

問合せ先 〒160 新宿区須賀町14大湊ビル4F

新 交 響 楽 団 TEL. (357) 5 2 5 5

——但し、平日午後のみ——

新響・登録会員募集中

＜新響の演奏を聴いてください＞

◇新響の演奏会の御案内を毎回お送りします。

◇入場券は割引させていただきます。

◇会員証を提示して頂けばプログラムは無料でさしあげます。

申込みは、〒160 新宿区須賀町14 大湊ビル 新交響楽団宛 ハガキにて 郵便番号、住所、氏名(フリガナ)、生年月日、ご職業、もしありましたらご所属の音楽団体、楽器をやられる方は楽器名を付記してください。